

発行  
英知大学  
兵庫県尼崎市若王寺  
2-18-1 (〒661)  
TEL (06) 491 - 5083  
編集  
英知大学広報室

1983. 4. 30.

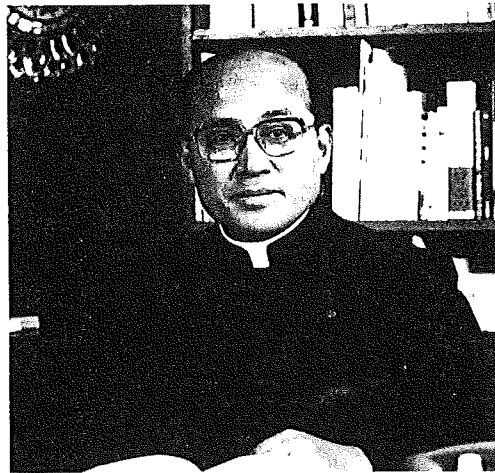
UNIVERSITAS SAPIENTIAE

No. 37

### 入学式式辞

## 「英知大生として目指すべきもの」

学長 傘 木 澄 男



本日ここに二六二名の新入学生をお迎えして、第二十一回英知大学入学式を挙行いたしますことは、私共本学の教職員、在学生、並びに関係者一同にとりまして、まことに大きな喜びであります。新入生の皆さんご入学おめでとうございます。ご父兄の皆様にも心よりお祝いを申し上げます。私は今日、本学における皆さんの学生生活について、皆さんに要望したいと思っております。皆さん三つの点にまとめてお話しして皆さんへの歓迎の辞といたしたいと思います。

勉学が第一の目的  
まず第一の点は、大学というところは何よりも研究・教育と人間形成、

即ち学問を通して人間をつくる所であり、勉学こそ大學生の第一の務めであるということですので。勉学を第一の目的としないなら、大学へ来るのは無意味なことであり、文化を生かし、生活を支えている知識を広く身につけて人間の充実した活動のものととなる思考力と判断力を養う途は、勉学をおいてほかにありません。特に今日のような複雑で流動的かつ不確定な時代に最も必要とされるものは、自分の頭で考え、理解し、判断する知性の能力と、その基準となる健全な価値観です。とりわけ情報化社会といわれる今日の社会では、雑多な情報の洪水の中で押し流されてしまわないために、様々の現象やそれに関する多くの考え方を批判的に受けとり、自分の頭でそれらを分析し、判断し、評価して、自己の立場を構成する能力が求められます。そのためには自分一人の個人的な努力だけではなく友人同士の、また先生方との知的交流、議論や共同の作業によって、物の正誤、善悪を識別し、取捨選択していきける批判的能力を培っていかねばなりません。しかも、こうした知性の能力を伸ばす努力は、自分一

人の人格形成と幸福のためだけではなく、我が国の、そして人類の文化全体の発展のためでもあります。このような責任を大学、大學生、大學生である以上は自覚して、文化の向上、社会の発展のために高い学問・研究の水準を維持する努力が求められているのです。大學生の間に何をしなければならぬのかという明確な目的意識なしに学生生活を過ごすならば、あり余る自由の中で、入学した時の知識も失い、人間としての態度においても退歩の一途を辿るといふ危険も皆無ではありません。皆さんはこれから、大学の授業科目を中心に、できるだけ勉学に励み、読書をし、またいろいろ経験を通じて、生らしい知的な関心へと結びつけて、思考力、判断力という大切な精神の能力を養っていくよう努力して下さい。

#### 自主性ある人間

皆さんに要望したい第二の点は、人に対する依頼心、甘えの態度を捨て、自分の意志と責任において行動する、自主性のある人間になって頂きたいということです。皆さんは今までは、きめられた事をきめられた方法で果たすというだけで、自主的に選択しながら、自分の責任において行うということは余り求められなかったことでしょうか。しかし大学においては、すべてが一人ひとりの学生の自覚と責任に委ねられます。これは大學生が自分の生活や務めについてはずで大人であり、大人として振舞うこともできるし、またそうすべきであるからです。また学校教育の最終段階である大学において、一人前の社会人としての資格を確実に身につけるための訓練でもあるわけです。

しかし今日残念ながら、この自主性の欠如ということが大學生の目立

った特徴の一つであり、これが今の日本の大学の深刻な問題となっているというのが実状であります。即ち最近の大學生には、自己中心的に自分の生活を築き、自己閉鎖的な生き方を好むという傾向が見られます。そのため何事においても人に頼り、自分ですという自主性が乏しく、人間関係も自分に役立つ人だけに限ってしまう傾向さえ見られます。そうした傾向が定着した原因は明らかです。今日のような豊かな社会に生まれ、貧困や耐乏生活の経験もなく、家庭の過保護と、日本の社会のあらゆるところに見られる甘やかしの中で育った者は、自然にいわば人生を見くびったような態度が身につけてしまったり、自分の視点からしか物事が見られず、自分から遠い者に対する思いやりや、直接関わりのない世界の人々や出来事に対しては関心を持ってないといった視野の狭さ、自己中心性に陥りがちです。この点には人によって差のあることですが、今の時代の風潮であり、特に日本の若者の中に多かれ少なかれ浸み込んでいるこうした傾向を、皆さん一人ひとりが自分自身の問題として自覚し、これを直すことを、これからの大学生活の間の自己の課題として取り組んで頂きたいのです。

皆さんにとって、大学時代に最も大切なことの一つは、良き友人をつくることです。友人との交りがあったはじめて、大学の目的である知的能力の開発と人間形成の成果が挙がるのです。ところで、良き友を得るために一番必要なものは何でしょうか。それは何よりも、自己中心の心を破って、積極的に他者に向かい他者を理解し、思いやる心と、ひとに対する自分の責任を自覚し、これを果たすまじめさです。また今日、我が国では国際性、国際人となると

ということが各方面において重要な課題とされております。本学も国際人の育成ということを目指して掲げています。皆さんがこれからしようとしておられる外国の語学や文化の勉強も、国際人となるための大切な手段ではありますが、国際人の一番大切な要件は外国の文化や外国人の考え方を深く理解し、正しく評価し尊重することのできる能力です。そのためにも私達には自分の小さな、自分中心の世界から出て、広くすべての人々と結ばれていく努力が心要だと云えるでしょう。自己中心では国際人にはなれないのです。

人生観の確立

皆さんに対する第三の要望として最後に申しあげたいことは、人間形成は知性の練磨と人格の修養に留まるものではなく、人間完成に必要な次元として宗教、即ち神との関わりまで到らなければならぬということです。私はここに、皆さんが他の大学ではなく、英知大学に入学されたことの特別な意義があると考えます。即ち本学はカトリック大学であり、キリスト教、とくにカトリックの人間観、人間理解に基づく人間形成と文化の創造を建学の精神としている大学です。カトリックの人間観とは、私達人間は創造主なる神に向かつて開かれ、その高さにまで招かれ、呼ばれた存在であり、そこに人間であることの素晴らしさ、人間存在のかけがえのない尊厳性と神秘性があるのだ、という確信です。本学の名称「英知」、ラテン語でサピエンチアという言葉は、知恵そのものである神から賜ものとして人間に与えられた、最高の知恵を意味しますが、知性の面だけではなく、人間存在そのものの完成された段階を意味しており、カトリック人間教育、人間完成の理想を表す言葉として用

いられています。さて、人間が人間らしく生きるためには、しっかりとした人生観を持つことが必要です。大学はまさにこの人生観を身につける時期です。人生観というのは、いわゆる処世術や人生哲学ではなく、真の哲学、自覚された価値観です。皆さんは、生活の中に生き甲斐や感動を求めておられます。そしてそれを友だちとの交き合いや、スポーツ、音楽、課外活動などに見いだしている人もいます。また多くの学生は教室の授業にしばらくそれが感じられないために、興味を失ない、生きがいや感動を感じさせてくれない授業に不満を抱いています。しかし生きがいと人生観とは違うものです。人生観とは、自分は何のために生きているのか、人間は何のために生きるのか、という目的観です。皆さんは感動を求めておられますが、人間にとってもっと根本的なものは、人生の意味と真理を探究する地味な努力なのです。生きがいを感じさせず、感動を与えぬものにそっぽを向いているなら、皆さんには進歩はありません。人生観とは世間的な目標、目的を超えて、人間として生きる目的そのものを見据えたところに確立されるものです。それは宗教心、信仰的態度、求道の心なしには得られません。

今日深刻な社会問題となっている年少者の暴力事件などを考えます時、私共は日本の戦後の教育、否、明治開国以来の一貫した日本の教育に何か根本的な欠陥があったのではないかと考えさせられるのです。その欠陥は一体どこにあったのでしょうか。戦後三十五年の日本の政治、文化、教育そして社会道徳においてさえも、その指導理念とされたものは、いわゆる民主主義の諸々の理念、即ち個人・個性の尊重であり、自主・自由であり、生命の尊重、暴力の否定、平和ということでした。しかしたとえこれら理念がいかに大切で、高尚なものでありましても、そのいずれもそれ自体の内に究極の価値を持つわけではありません。即ち、何のための理想かという、その究極の目標を示そうとしない、また示すこともできない教育や文化は、やがて青少年を惑わし、反ってこれら理念そのものや、それを唱える大人社会への不信を生み出す結果に終わります。人間は何に向かつて自由であるのか。何故に生命は尊いのか。なぜ暴力は否定され、人の世は平和であらねばならないのか。これが示されず、探究もされないところには混迷は必ずです。その混迷から今日家庭や学校における教育の危機的な状況が生み出されているのではないのでしょうか。これはもはや宗教の問題と云うべきでしょう。日本の社会は今宗教的なめざめを求められているのです。私は皆さんが本学において人間存在の意味、人生の目的を尋ね、とくにキリスト教の立場、その価値観からの問い掛けをまじめに受け止めて、しっかりと自己の人生観の確立を大学生活の間に成し遂げて頂きたいのです。

以上入学式に当り、皆さんへの要望として申し述べましたことは、第一に、勉学こそ大学生である皆さんで磨いて欲しいということ、知性の能力を磨いて欲しいということ。第二に、しっかりと自分の脚で立つ人間人格の形成に心掛けること。そして第三に、本学入学の意義を考え、自己の人生観を確立すること、この三点です。どうか大学へ進学できた幸運と特権を無駄にしないように、そして、皆さんを支えて下さる御家族の方々への犠牲、並びに社会の期待

に十分に応えるように、勉学と人間形成に励んで下さい。皆さんがこれから充実した学生生活の日々を送られますように祈り、期待しております。

桜花の歓迎を受けて

昭和五十八年度入学式

前夜来の雷雨もきれいに晴れ上った四月四日(月)午前十時から昭和五十八年度入学式が本学講堂で挙行された。式は混声合唱団の聖歌によって厳肅裡に始められた。まず松本宗教主事によって聖書朗読および入学式の祈りが唱えられ、次いで入学者英語英文学科百五十九名、西語西文学科四十三名、仏語仏文学科四十八名、神学科十二名計二百六十二名の指名が行われた。



午後一時から傘本学長の講話があり、「正しい方向づけ」を目指す才

リエンティシヨンの意義や本学の沿革・特色についての説明、新入生への期待と激励、学生生活全般についての注意などが述べられた。次いで学科別紹介と、アドバイザー制に基づくグループ分けが行われ、新入生たちは担当の先生方に引率されて学内を見学したり、詳細な指導を受けたりしたあと、散会した。

翌五日から五日間にわたって各種のオリエンティシヨンの行われ、新入生は大学生生活への第一歩を踏み出した。

後援会会長吉田宏氏祝辞要旨 「人はころんだ時それを坂のせいにする。坂がなければ石のせいにする。石がなければ靴のせいにする」というユダヤの格言があるが、理屈が多く自己反省の少ない状態が続けば社会の落伍者となることは必定。社会は共同生活をする人間の集団だ。他人の立場を思いやり、同級生はもちろん、先輩諸兄とも積極的な交りをもつて研鑽に励み、よい友人をつくって欲しい。

同窓会会長福原氏祝辞要旨 大学時代は社会人として巣立つための常識を養い、人間的に成長できる大切な時期で、そのためには次の事柄が必須要件だ。「持つて生れた個性をどのように世の中に生かすことができるかについて思考し、他者に耳を傾けながら忍耐力と愛情を育てていくこと。体験や読書から得られる知識をどれだけ多く身につけられるか。またこれらを今後どんな方向に傾けていくかということ。自分の標的を決めて方向づけを間違わぬようにしなければ成長はななく、時間、お金、体力の浪費になるだけだ。しかし若者には口マンもまた必要だ。明るい健康的な大学生活を過して欲しい。

来賓の吉田後援会会長と福原同窓会会長が祝辞(要旨別掲)を述べられた。式終了後クラスごとの記念撮影が行われ、新入学生は初対面のクラスメートらと打ち解けてカメラに収まった。

# 新入生オリエンテーション

学生部長 西山俊彦

フレッシュマンを迎えた大学は喜ばしい活況を呈する。第一に行われるのがオリエンテーション、即ち大學生活への正しい方向づけである。ここにそのプロフィールの概要を紹介する。

四月四日(月)入学式の学長式辞において建学の精神を学んだ新入生262名は、午後にはまづ『学長講話』に耳を傾け、キリスト教精神と国際性のみなざる家庭的なキャンパスについて、また本学の沿革と特徴、学生生活の心得などを諭された。続いて『学科別集合』、学長講話と関係教員の紹介、英、西、仏、独語での生のスピーチはさぞ印象的だったに違いない。『アドバイザー』との初顔合

せ』はこの日最後のプログラム。自己紹介、年間予定の打合せはもとより、アドバイザーの先生と三々五々各所を訪れ、フレッシュな姿を写真に収めていたところは英知ならではの言える微笑ましい光景であった。

四月五日(火) 二日目午前は『教務課』『学生課』のガイダンス。教務課による履修登録の説明では自主的勉学のあり方を、学生課のそれでは責任ある学生生活への心構えを学んだに違いない。午後の『教養課程ガイダンス』では課程主任の講話と担当教員の紹介が行われ、早速まみえる先生方の顔を覚え、文学部における教養の意味合いなどを確認した。四月六日(水) 『学生部』『国際交

流委員会』『職業指導課』オリエンテーション、それに『図書館』『宗教主事室』オリエンテーションと盛沢山のプログラムであった。前半では三年次に予定されている海外研修旅行、四年次に避けて通れない就職についての説明を聞き、期待と責任を覚えさせられたのに対し、後半で



西山俊彦教授

は美しいチャペル、図書館等の利用法を教わり、潤いと喜びを覚えたに違いない。四月七日(木)、『学生会オリエンテーション』の日。学生会についての説明に続いて各種クラブの紹介は圧巻、先輩連の熱烈勧誘の家庭的ムードに一時を忘れただけでなく、四年間を託そうと志した新入生も少なくなかったはず。この日午後から『履修登録』『教科書購入』も始まった。真新しい教科書を手にする感触はいかばかりであったろうか。

入学式の緊張が徐々にほぐれるに

つれ、桜も開花し始めた。周到なオリエンテーションを了えたフレッシュメンはこれから英知の園に力強く根を下し若枝を伸ばしていくことであろう。



## 西山俊彦教授、学生部長 就任にあたって

「今、「こ」を大切に

「寝まじい学園」  
英知大学は素晴らしい大学だと思っ先づ清潔だ。汚れていけば誰れかがソツト片づける。いい人々が集っている。教えることを天職とする心温まる先生方、奉仕の精神で一杯の職員。それに何よりもいい学生がいる。互いに声を掛け、挨拶を交す仲だ。ボールめがけてダツシユするたくましい声がグラウンドにこだまする。読書に耽る者の姿は芝生に、図書館に。素晴らしい学園だ。一人々が秘めている可能性に大いに応えてやらねばと思う。

「英知を知る人」を  
学問は人を変える。目を変え顔を  
変える。大学は人間形成の場である  
知的陶冶を通して。学問の  
府が学問の府であり、学生が学生で  
ある常態を目指したい。クラブも結  
構、レジャーも結構、アルバイトも  
必要ならば又結構。楽しくやろう。  
しかし、やるべきことを先づやろう。  
目先のことに心惑い、雑念に現を  
抜かしてどうしよう。四年という勉  
学期間に大いに蓄わえ、自らを完成  
品として、胸を張って巣立つて行っ  
て欲しいのだ。

「抱負？」  
就任の一語を求められた。長らく  
御活躍下さった前任者松本先生程の  
幅もタレントも私にはない。全く荷  
が重い。皆さんと一丸となって平常  
の事柄を心掛けて行けばいい。英知  
には早や十八年いてしまった。英知  
を愛する心、前進をめざす情熱  
だけは事欠かない積りである。楽し  
いことも勿論大好き——スポーツも  
コンパも——  
先づやるべきことを第一として共  
に励みゆく心算である。

昭和58年度 入学式およびオリエンテーション日程

4月4日(月)	10:00	入学式 講堂
	1:00	学長講話 H1301教室
	1:45	学科別集合 英語英文学科 H301教室 イスパニア語科 218教室 フランス語科 214教室 神学 210教室
		アドバイザー制に基づく グループ分け(クラス別集合)
	2:30	英語英文学科 1組 31教室 2組 33教室 3組 315教室 イスパニア語科 218教室
		グループ別ミーティング (適時解散)
4月5日(火)	9:00-10:30	英語英文学科 教務課ガイダンス H301
	10:40-12:10	学生課ガイダンス H401
	1:00-2:00	教養課程ガイダンス H301
	9:00-9:45	学生部 オリエンテーション H301
4月6日(水)	9:45-10:15	国際交流委員会 オリエンテーション H301
	10:15-11:50	職業指導課 オリエンテーション H301
	11:00-12:00	図書館オリエンテーション H301
	12:00-1:00	宗教主事室オリエンテーション H301
	1:00-2:00	図書館オリエンテーション H401
4月7日(木)	9:00-12:00	学生会 オリエンテーション H301
	1:00-4:00	履修登録 教科書購入
4月8日(金)	9:30-4:00	履修登録 教科書購入 (08:11:30-12:30 13:45休)
4月9日(土)		(事務整理) 「登録」や「購入」はできません
4月10日(日)		休業
4月11日(月)	9:00-4:00	全学授業開始

国際交流

ローラス大学訪問雑感

井 勢 健 三

(英語英文学科助教)

ローラスの日々は楽しかった。ここでは善意と寛容があつて、僕達の心を暗くする要素は全くなかつたといえる程だ。昨年同行したイギリス、ヨーロッパ研修旅行との差があるとすれば、結局は研修先の違いに集約されると思う。経営形態の同一性と、姉妹校というローラスとの関係が、歴史の浅さにもかかわらず研修や交流を予想以上に円滑にし、僕達に深い印象を与えてくれた主因のように思える。

当局や学科関係者との協議の合間をぬつて、出来る限り多くの授業を学生と共にする努力をした。三十人以上の教授陣が入れかわり立ちかわ



り、アメリカ文化を学生達の頭に叩き込んでいくてくれる。人種、教育、政治、経済、歴史、宗教、体育及び文学とほぼアメリカの姿を概観させてくれるようになっていく。教授陣の講義の用意周到さも印象的であつた。五十分の話の時でも、タイプ用紙五枚きつりとうめつくしていた。もつとも各講義の途中、学生のため必要に応じて登場した松本神父の通訳が、無用になつてくれたらと思ふことしきりであつた。ただ、一通り授業内容の骨子が、僕達教師側も知ることが出来た訳だから、来年度からのローラス訪問予定者に、前もつて必要な知識を英語で練習させておくのも、彼等の研修をより有意義にしてくれると思われる。

紹介されたローラスの学生達や、その友人達との交流は、まずまず皆こなしていたようだ。最初の一週間のどこでも目にする恥らいと引つ込み思案も、二週目に入るとほとんど跡かたもなく消える。若さの強みかも知れないし、聞き直れる術を覚えるのかも知れない。この度胸が「ローラス・アワー」という三十分のテレビ番組出演を、無事に乗りきれた背景になつたのだろう。

ホーム・ステイは何よりも学生達に強い印象を与えたようだ。比較的質素な食事を埋め合わせるに過ぎる善意で、心動かされなかつた学生は一人としていなかつただろうと思われる。良い意味のアメリカ人気が、学生達にそのまま実感出来たであら

うことは喜ばしい。これは部分的に滞り期間の幅によるのかも知れない。二週間を大きく増減すれば、あの興奮は起こりにくいだろう。ただこういう様々な体験を生かして、一人でも長期留學生が生まれてくれば良いのにと思ふ。

教師間の研究上の交流に関しては、少なからぬ成果があつたように思われる。例えば、英文学部長の話では、必要な物があれば知らせろ、もしローラスになければ注文して送るものとことだ。又問題は多いものの、教授交換は相手の強く望むところであつた。各分野担当者に会つて交流の可能性を確認した今は、必要に応じて情報の行き来が見られるだろう。代表的日本文学と、俳句に関する書物の入手が、当面の彼等の要請であつた。

副学長バータ神父、現代外国語学科長ウィッティン氏と今後の交流計画について話しあつた中で、ローラスは来年秋からの初級日本語講座に、二段構えで受講者の募集をするという。一講座はローラス生対象、一講座は社会人対象で、出来れば日本文化入門も期待しているそうだ。事務的な問題で、この二氏とは過去幾度

も手紙の往復で知りあつていたが、今回じっくりと時間をかけての話し合いで理解が深まつたことは何よりであつた。

さて、今回僕達の過した所は敬度な教養ある人々の住む「丘の上の町」であつた。教学科長マックス氏は、「治安」という言葉が使用される必要性はほとんどないという。八十パーセントのカトリック信者から成る住民の価値観の成果と見てとれよう。それゆゑ今後も学生にとつても、送り出す人々にとつても申し分ない場所であらう。だが黒人問題、日本製失業の余波が、この「楽園」にも徐々に忍び寄つてくる場面は、幾度となく目の当りにしたものだ。

そういった事情はともかく、交流はどちらが入超でも出超でも、将来問題をかかえるだろう。しばらくはローラス側の入超が続くかも知れない。それが彼等の不満に発展する以前に、僕達はフェアな関係作りの努力をしなくてはならないだろう。姉妹校正式調印の為、五月末に予定されるバータ副学長の英知公式訪問招待が、対等な関係作りのささやかな端緒となつてほしいものだと思つている。

イス。パニア研修旅行

北 城 健 次

(西語西文学科助教)

円やドルを懐にイスパニアを旅行すると、日本の不景気を忘れられる。高級レストランで、たらふく食べても勘定書に胃ケイレンを起す心配はない。マドリッド市民に言わせると物価はちつとも安くはないのである。もちろん、円高のお陰である。筆者は円に感謝をしている。そんなこと

より、この研修旅行に別のことを期待していた。外国へ行くと、まず面喰らうのは文化的ギャップである。習慣や思想の違いなどを研究するのは非常に興味があり、意義の大きいことであるが、今回はそれにもかかわらず、人間は何国人も皆同じだといふ当たりまえのことを知りたかつ

学年暦

昭和五十八年度 (58・41・59・38)

四月	四日(月)	入学式
	五日(火)	新入生オリエンテーション
	八日(金)	イシヨシ
	十一日(月)	前期授業開始
五月	十四日(木)	定期検診(二、三回生)
	十八日(月)	体育祭
七月	八日(金)	休暇前授業終了
	九日(土)	夏期休暇
九月	七日(木)	休暇明け授業開始
	八日(金)	定期検診(三、四回生)
	二十二日(木)	前期授業終了
	二十四日(土)	前期末試験
十月	一日(日)	試験休
	三日(月)	後期授業開始
	三十一日(日)	大学祭準備
十一月	一日(火)	開学記念日・大学祭
	二日(水)	大学祭
	四日(金)	大学祭後始末
	十二月二十一日(木)	休暇前授業終了
	二十二日(金)	冬期休暇
一月	七日(土)	休暇明け授業開始
	九日(月)	後期授業終了
二月	二十七日(金)	後期授業終了
	三十日(月)	学年末試験
三月	十日(金)	卒業式
	二十日(火)	卒業式

入学試験結果

昭和五十八年度

昭和五十八年度の入学試験は、推薦入学が五十七年十二月一日・二日、三日、一般入試は五十八年二月十四日に実施され、編入学者四名を含む(五頁五段目へ)



レティーロ公園

たのである。もうひとつは、若い学生達がヨーロッパの国々に初対面して、どのような反応を示し、いかに対処するかを見ていただきたかった。訪れた国はわずかだったが、いずれに關しても成果は上々だったようである。夢に見、憧れ、写真と地図でしか見たことのない国、三年間の努力の成果を試すことのできる地へやってきたのだという実感と期待に胸を震わせる人たちが、勉強不足で不安におののく人たちなど様々だったが、実際三週間が過ぎて振り返って見ると、皆の心に残るのは美しいものに対する感動と、とにかくもやりぬいた満足感ばかりであるように思える。もちろん最初の内は当惑していた学生もいたが、やがては馴染み、鍛えられ、楽しめるまでになつていった。大学では怯え、教師からは逃げまわつていた者が現地では西語で電話をし、イスパニア人とやりあうなど信じられぬ快挙を見せるくらいであった。

「スペインを離れるのは残念だ」「まだ帰りたくない」というのが誰も口から出てくる台詞だった。三

月五日の早朝、バルセローナ市の海岸沿いにあるフランシア駅に我々は集合した。いよいよパリに向けて出発である。フォームには、各家庭の人々が見送りに来てくれた。抱き合つて別れを悲しむ者、いつまでも固い握手をかわして名残を惜しむ者、あるいはさらりと別れを告げる者などさまざまであったが、再会の誓いを残して愛するイスパニア語の世界を後にした。これが研修旅行中で最も美しいシーンのひとつとして引卒者の脳裏に去来している。これにつ

### ヨーロッパ断想

学生のお伴で、二月下旬から三月中旬にかけて三週間程ヨーロッパ各地を見て廻る機会を得た。以下はその断想である。

ロンドン美しい街だ。街全体が公園のような街だ。名物のダブル・デッカー(二階建てバス)の傍を馬上の人が駆け抜けて霧の中に消える。赤煉瓦と石畳の街並は、まるでポストンそのもの。ハイド・パークはポストン・コモンを数十倍広くしたようなものだ。新大陸への入植者たちの痛切な郷愁をイギリスに来て改めて思い知らされる。

同じことはケムブリッジについても言える。この小さな大学街を歩いていると、あたかもニュー・イングランドのケムブリッジを歩いているような錯覚に陥るほど、ふたつの大学街は似ている。

ヘイステインクスはなにもない街だ。あるものと言えば、古戦場と

いては、学生達に感謝している。これ程短期間に、原地の人々に溶込み、その世界に同化し、友情で結ばれるには、学生達にも十分な適応力、心の広さと柔軟性があつてのことと思う。また、イスパニア人の温かいハートに触れることのできた彼らは幸いである。この上に、語学力がグンと向上すれば言うことなしなのだが、ともかく、こうして遅く生活できたという自信は、将来かならず大いにプラスとなるものと信じ

### 沼野元義

(教養課程講師・心理学)

海だけ。ロンドンから南へ約一時間汽車で下つた処、ドーヴァーに面した港街だ。雪こそないが海風が刺すように冷たい。そのシー・フロントにある古いアパートの一隅が、学生たちの二週間の勉学の場、インターナショナル・ハウスである。

風の冷たさに較べ、人間はむしろ優しい。学生の世話役、パットおばさん、校長のサイモン、そして担任の先生エイドリアン、みんな温かく迎えてくれた。

フランス組の連中は仕合せである。今回は仏文からの参加者が諸般の事情で二名しかいないので、クラスは個人教授のようなものだし、しかも滞在先の優しいマドモアゼル・プルトウの家では毎日美味しいフランス料理にありつけるという次第。ふたりの女子学生の唯一の心配は、帰国までに何キロ重たくなるかということ。小生もひと夜の御相伴にあずかり、フランス料理の粋を、アペリテイフから最後のデザートに致るまで

堪能したのではあります。バルセローナは不思議な街だ。一方に近代的佇いの新市街があれば、他方には中世さながらのゴシック地区がある。大聖堂から海岸通りに至る一画がゴシック地区で、うす暗い路地裏に一步踏み込めば、そこには中世さながらに嘗々と続く庶民の生活がある。

学生たちの学校は、新市街の中心カタロニア広場の近くにある。先生は陽気なスペイン娘、マリアとアスセーナ。

人々の日常語はカタラン、つまりカタロニア語だ。スペイン語は彼らにとつていわば「外国語」なのである。だから通りの名前もカタロニア語とスペイン語との伴記(ちようどカナダのケベックに似る)。そしてそのカタロニア語の標識の方がどこでも真新しいが目をひく。これはフランコ政権時代にはカタロニア語標識が許されなかった事情を物語るものに外ならない。

スペインで往生したのは、どこもかしこも二時には軒を閉してしまふことである。彼のシエスタなるものためである。これが五時か六時頃まで続く。おかげでこちらは待望のピカソ美術館もマレーヌ美術館も見られず終い。レストランなどは八時頃にならないと開かない。夕食はまづ九時以降だ。慣れるまでは学生たちも、すき腹を抱え難儀したようである。

帰路は、全員パリで合流し、ローマ經由で帰国しました。ローマでは市内観光とヴァチカン見学、それにもちろん美味しいスパゲッティも食べました。唯一の残念は、日程の関係で法王謁見が叶わなかったことである。

志願者数・受験者数・合格者数・倍率

募集人員	志願者			受験者			合格者			入学者			倍率		
	推薦	一般	計	推薦	一般	計	推薦	一般	計	推薦	一般	計	推薦	一般	
英語英文学科	90	237 (56)	415 (99)	652 (155)	229 (54)	368 (75)	597 (129)	78 (40)	122 (51)	200 (91)	77 (40)	80 (22)	157 (62)	2.9	3.0
イスパニア語 イスパニア文学科	30	43 (7)	93 (22)	136 (29)	42 (7)	86 (18)	128 (25)	25 (6)	34 (16)	59 (22)	24 (6)	19 (7)	43 (13)	1.7	2.5
フランス語 フランス文学科	30	35 (8)	91 (22)	126 (30)	35 (8)	85 (19)	120 (27)	19 (6)	35 (18)	54 (24)	18 (6)	30 (13)	48 (19)	1.8	2.4
神学	10	4 (1)	7 (2)	11 (3)	4 (1)	7 (2)	11 (3)	4 (1)	6 (2)	10 (3)	4 (1)	6 (2)	10 (3)	1.0	1.1
合計	160	319 (72)	606 (145)	925 (217)	310 (70)	546 (114)	856 (184)	126 (53)	197 (87)	323 (140)	123 (53)	135 (44)	258 (97)	2.5	2.8

※受験者・合格者数(二内学生数)

二六二名が入学した。入試結果は別表の通りだが、出願者数については西語西文学科・仏語仏文学科は昨年並み、英語英文学科は昨年の一、四倍の増加、競争率は三倍となった。

### 新入生にインタビュー 外国語が好きで：

入学式の日に新入生をつかまえて、今後の抱負、本学の印象などを一言づつ語ってもらった。

「学校で勉強するという意味ではこの四年間が最後であり、将来社会人として必要なことは今のうちにしつかり学んでおきたいと思うので、勉強は真面目にやり運動と両立させたい。」

「心身を鍛える。そのためには勉強はもちろんクラブ活動も精一杯やる。どのクラブに入部するかはオリエンテーション終了後決める。」

「初めて九州の親元を離れたせい、世間にボンと放り出された思いで、しつかりしなくてはと決心している。」

「カリキュラムなどの点で高校とはずいぶん違うので、講義を楽しみにしている。英語英文学科を選んだのは、特に文学を研究したいというよりむしろ英会話が大好きなので、この四年間でうんと語学力をつけて、将来は語学力を生かせる職につきたいと思ったから。」

「教職を希望している。外人の先生が多いのを幸い、在学中に英語の力をつけて英語検定一級の取得を目標にしている。」

「受験を前に下見に来た時、在学生が学内を案内してくれた。高校はプロテストだった。学内にある小さなチャペルが大へん気に入って、入学できて嬉しかった。希望がいつぱい。」

「小さい大学だという印象をもったが、家庭的雰囲気は自分に合っていると思った。」

「下見に来た時の印象では、自分が小さな女子高校だったせい、英知は大きな大学だと思った。建

物はすべて美しく、広々としたグラウンドでの先輩たちの練習風景を見て、ぜひ入学したいと思った。」

### 「出会いの中で」

山口 宏二  
神学科三回生



英知大学に入学しては二年が経ち、この間に多くの出会いを体験することができました。中でも大きなものは釜が崎と出会うことです。

釜が崎はご存じのように、大阪府西成区にあり、僅か〇、六二平方キロメートルの狭い場所、その地域に凡そ四万二千人という人々が住んでいて、その半数の約二万人が単身日雇い労働者なのです。現代の巨大な構造管理社会に耐えられなくなつた人々や、また家族から見捨てられた人々、自ら自由を求め、また競争に敗れてこの街に住みつくようになつた人々の集まつた街。不況のため一日の仕事にありつけるかどうか容易ではありません。運よくありつけたとしても、低賃金で汚く激しい労働で、また釜が崎の人間ということとで虐待を受けたりもするのです。また仕事にありつけなかった人々は、一日中なすこともなく、道路や公園で寝たり、ぶらぶらしたりしています。

お金のあふ労働者は、ドヤと呼ばれる簡易宿泊所に寝起きしています。

が、仕事にあふれ、お金のない人は寒い真冬でも道路や公園で野宿しているのです。もちろん中には凍死する人も出ます。また故郷を離れ家族と別れた人々は、仕事を終えて帰ってきてても、誰れも迎えてくれない淋しさと、生きる目的や希望のない生活の苦しみを酒で紛らわそうとします。こんな生活をしているので、けがをする人、体をこわす人、病気になる人がたくさんいます。同じ人間なのに、釜が崎に住んでいるということだけで人間扱いされない。まだ釜が崎の全てを語つたわけではないけれど、こんな感じの街です。

この釜が崎と出会うって感じたことは、自分は一日一日を神様のために大切に生きていこうか、大学生として精一杯生きていこうかという事です。大学生として今やらねばならないこと、今しかできないことを中途半端にやつていないだろうか。また、自由な時間を多く取れる今、それを自分のためだけに使う今、助けを必要としている人のために使うことこそ神様に喜んでもらえることではないかと感じました。そういうことをするために神様が大学生という時を下さつたのかも知れない。前までは正直なところ、自分が大学生ということが好きではありませんでした。しかし釜が崎との出会いによって、大学生という与えられた時を、精一杯生きていかなければならないと心を感じています。残りの大学生活二年間を、神様のために頑張りたいと思っています。

### 学園ニュース

生命の絆を強めるために

——学内献血運動——  
カトリック研究会の主催する学内

献血も六月、十月、一月と年三回実施されるようになって、四季のキャンパスに欠かせない行事の一つとなった。カトリック研究会では「採血者は冬期に減少する傾向があるが、回を重ねるごとに学生間の善意と関心も高まり、カトリックの奉仕のねらいが具体化されたように思う」と喜んでいる。昭和五十七年度の採血者数は、のべ三五五五人で、七一〇〇ccの献血量だった。

\* \* \*

旧クラブハウスを新装

昨年十二月に新築された鉄筋二階建の学生クラブハウスは、一階が運動系クラブに、二階が文化系クラブに、それぞれ利用されるようになって、キャンパスは一段と華やかさを増しているが、このほど空家となつた東旧体育系クラブハウスを改装して、ここに学生会執行部室と文化局および体育局の部室が設置された。

「課外活動は人格形成の絶好の場。できるだけ多くの学生に課外活動に参加して友情を培ってもらいたい」との大学側の要望によるもので、今後課外活動の一層の発展が期待される。

\* \* \*

四月からバイク通学も登録制に

本学では学生の自家用車通学を登録制にし、三・四回生で許可を受けたい学生だけが所定の駐車場を利用できる方法がとられており、昨年来順調に守られてきた。加えて四月からは車窓にステッカーを貼ることにしたため、これまでのようにいちいち許可証を取り出して示す必要がなくなり、検門がスムーズに運ばれるようになった。今月からオートバイ通学も規制されている。

### 人事

三月三十一日付

退職

- 教授(教養課程) 安田 久雄
- 教授(英語英文学科) 中園安四郎
- 教授(西語西文学科) イエズス・ゴンザレス
- 講師(教養課程) 木村 忠司
- 事務職員(教務課) 高島 政行

昇格

- 文学部長 山崎 正雄
- 神学科長 ゲツレルト・ベーク
- 英語英文学科長 山崎 正雄
- 教養課程主任 西山 俊彦
- 図書館長 松本 信愛
- 学生部長 中野 正勝
- 宗教主事 中野 正勝

四月一日付

新任

- 文学部長 ホセ・ルイス・アルパレス
- 神学科長 岸 英司
- 英語英文学科長 井上 博嗣
- 教養課程主任 玉谷 直實
- 学生部長 西山 俊彦
- 宗教主事 松本 信愛
- 図書館長 中野 正勝

昇格

- 助教授(英語英文学科) グニエル・グリフィン
- 講師(仏語仏文学科) 石野 好一

出版

芝垣哲夫講師(英語英文学科)は四月に天理時報社から「ADVANCED ENGLISH COMPOSITION」を出版した。(七八頁。一、〇〇〇円)

訃報

小林裕教授(英語英文学科) 尊父逝去 昭和五十八年四月五日 享年八十四才。